

## 【多摩丘陵・私の出会った生き物たち14】

### < オタマジャクシの春 >

桑原紀子

3月から4月にかけて、春だなあと実感させてくれるのは、蛙の卵です。

まだ早春といってもいい3月の半ば、私は文庫の子どもたちと、蛙の卵を探しに、多摩丘陵の山間の水田に出かけました。

目的地に着くと、田んぼが段々になって上に行くほど狭くなり、湿地帯となって雑木山に続いています。

全体枯れ草色の中に、ネコヤナギの柔らかい花穂がふんわりと咲き始め、耳を澄ますと、小さな流れがせせらぎの音をたてています。

山に近い田んぼの縁には少し水が溜まって、その中に黒い粒々を包み込んだ寒天質の塊が見つかりました。アカガエルの卵です。

子どもたちとわくわくしながら上の湿地帯の方まで探すと、そこにもいくつかの卵がありました。ひとつの塊のなかには数百もの黒い粒々が包まれています。寒天質が水を吸って大きく膨らんだのや、昨夜産卵したのか、まだ小さな透明の塊の中に黒い粒々がきらきらとしている新鮮なものもわかりました。夜には蛙たちの生命の営みでにぎやかだったはずの山間の田んぼは今は静かで、子どもたちの歓声が聞こえるだけです。ジャムの空き瓶に卵を少し入れて持って帰り、今年も育ててみる事にしました。

毎年でなくても、チャンスがあれば何回でも挑戦したいのが、実はオタマジャクシの飼育です。卵からオタマジャクシ、蛙へと劇的な変身をとげ

るこの不思議な生物は、身近なはずなのに知らない事がいっぱいです。

数年前の飼育中の事です。



後足が生えた後どのようにして前足が出てくるのだろうと、ちょっとかわいそうだけど手にとって調べていた時、掌で暴れたオタマジャクシの脇から、いきなり小さな前足がにゅっと飛び出たのです。続いてもうひとつも。私は

びっくりして水槽に戻しました。さっきは後足しか生えていなかったのに、もう両手両足が揃ったオタマジャクシになったのです。後足は少しずつ伸びてくるのに、と別のオタマジャクシを観察すると、どうも前足の出た辺りが角張って見えます。

その後の観察で、前足は膜に包まれた中ですでに出来上がり、ある日膜を突き破って出てくる事や、いつも左前足が最初に出る事など確かめました。

たんぱく質分解酵素の働きで、しっぽが少しずつ短くなり、ついには無くなってしまふ不思議、水中生活のオタマジャクシが、えら呼吸から肺呼吸に変わる頃、陸を作っておかないと溺死してしまう事など、毎朝小さな黒い群れを見るたびに、安堵と後悔を繰り返すのです。そして無事子蛙たちを元の田んぼに送り届ける頃、春は終わり、新緑の季節が巡っているのです。

今年はどうな発見があるでしょうか。一年に一度オタマジャクシと暮らす春の訪れです。